

=== T A C S 情報 第4号 ===

(Toyama Agricultural Cultivation Management Information System)

令和6年6月18日
農業技術課 広域普及指導センター

1 気象経過

(1) 気温

5月の平均気温は、17.9℃（対平年差+0.4℃）と平年並であった。
6月上旬の平均気温は、20.0℃（同-0.3℃）と平年に比べ低かった。
6月3半旬の平均気温は、25.5℃（同+4.5℃）と平年に比べかなり高かった。

(2) 降水量

5月の降水量は、228.5mm（対平年比 186%）と平年に比べ多かった。
6月上旬の降水量は、25.0mm（同 118%）と平年並であった。
6月3半旬の降水量は、0.0mm（同 0%）と平年に比べかなり少なかった。

(3) 全天日射量

5月の平均全天日射量は、18.0MJ/m²/日（対平年比 98%）と平年並であった。
6月上旬の平均全天日射量は、20.5MJ/m²/日（同 105%）と平年に比べ多かった。
6月3半旬の平均全天日射量は、27.4MJ/m²/日（同 157%）と平年に比べかなり多かった。

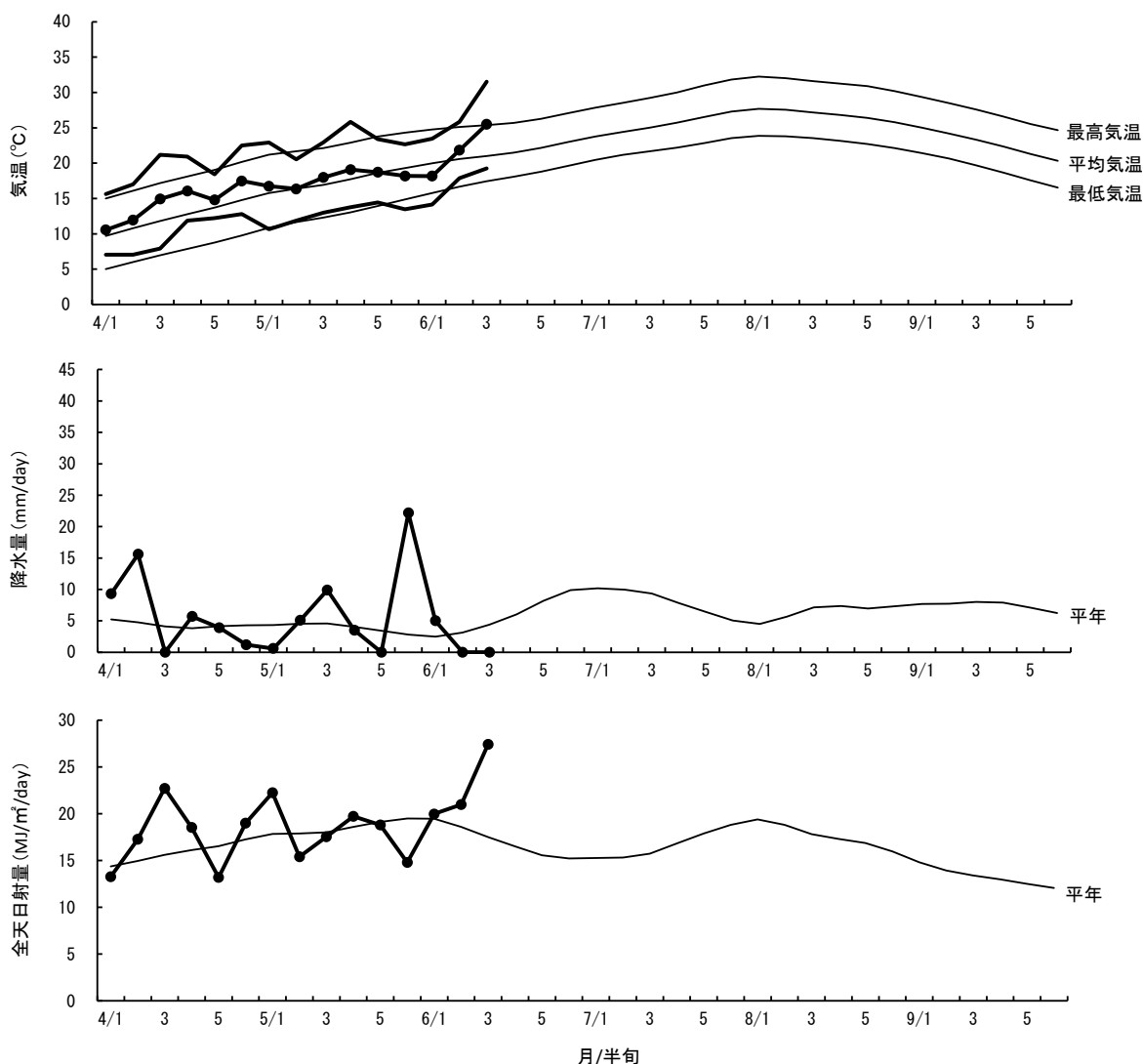


図1 令和6年の気象経過（富山地方気象台）

2 生育状況（生育観測ほデータ）

（1）てんたかく

平年に比べ、草丈、葉色は並、茎数は多く、葉齢は0.5葉進んでいる。

葉齢を揃えて比較すると、平年に比べ、草丈はやや短く、茎数はやや多く、葉色は並となっている。

幼穂形成期は、平年に比べ2日早い6月22日頃と見込まれる。

表1 「てんたかく」の生育状況（6月18日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色		幼穂 形成期
			(本/株)	(本/m ²)		葉色板	SPAD	
R6	5月2日	46.5	32.8	699	10.8	4.5	44.6	(6月22日)
R5	5月3日	44.0	27.1	577	10.2	4.5	41.1	6月24日
平年	5月4日	45.4	28.8	619	10.3	4.5	41.8	[6月24日]
前年比・差	-1	106	121	121	0.6	0.0	3.5	(-2)
平年比・差	-2	102	114	113	0.5	0.0	2.8	(-2)

注1) 平年 : H26~R5の平均、ただし幼穂形成期の平年値[]は、R2~5年の平均

注2) 本年の幼穂形成期は予測値

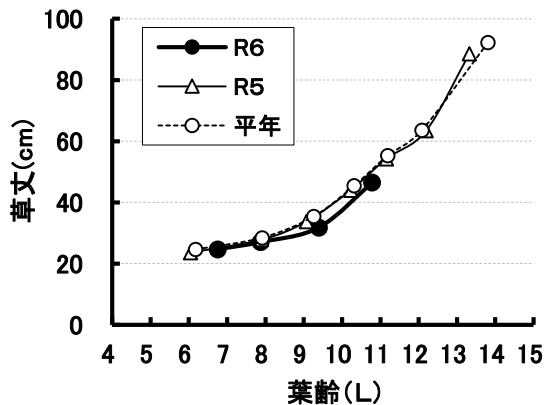


図2 草丈の推移（生観てんたかく）

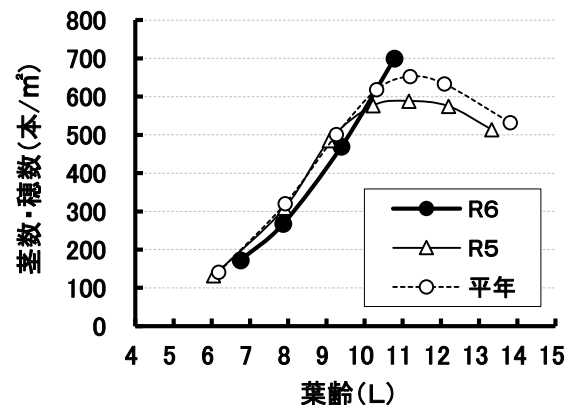


図3 茎数の推移（生観てんたかく）

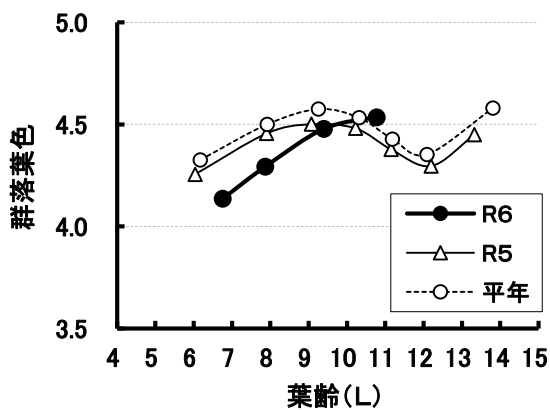


図4 葉色の推移（生観てんたかく）

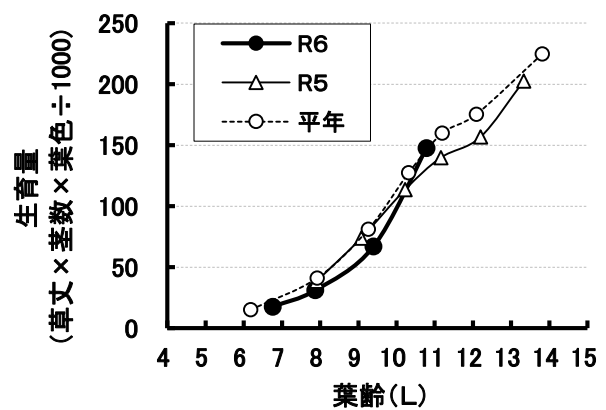


図5 生育量の推移（生観てんたかく）

(2) コシヒカリ

平年に比べ、草丈、葉色は並、茎数はやや多く、葉齢は0.2葉進んでいる。
 葉齢を揃えて比較すると、平年に比べ、草丈、茎数、葉色は並となっている。

表2 「コシヒカリ」の生育状況（6月18日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色	
			(本/株)	(本/m ²)		葉色板	SPAD
R6	5月14日	38.0	23.0	490	9.3	4.3	41.1
R5	5月13日	39.7	20.6	447	9.1	4.3	39.8
平年	5月14日	38.9	21.5	467	9.1	4.4	40.6
前年比・差	1	96	112	110	0.2	0.0	1.3
平年比・差	0	98	107	105	0.2	-0.1	0.5

注) 平年 : H26~R5の平均

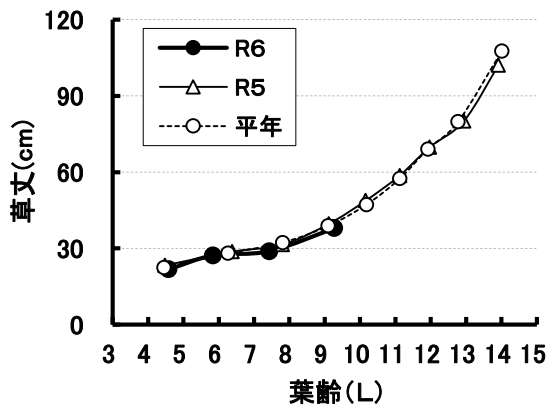


図6 草丈の推移（生観コシヒカリ）

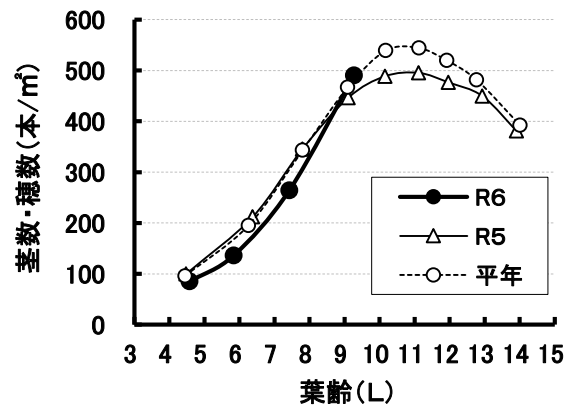


図7 茎数の推移（生観コシヒカリ）

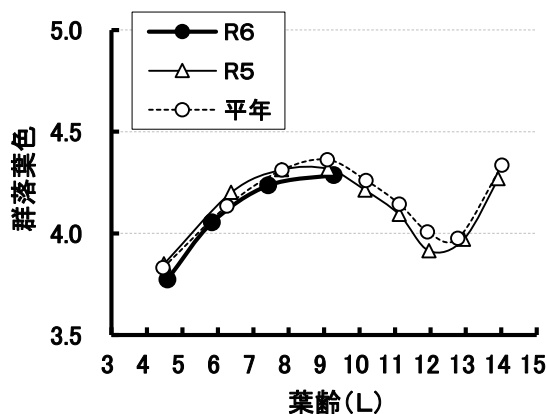


図8 葉色の推移（生観コシヒカリ）

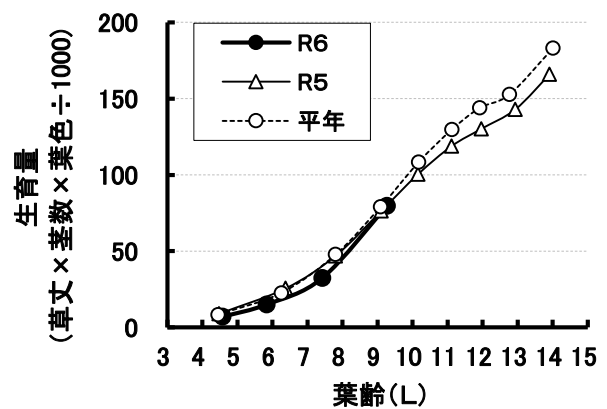


図9 生育量の推移（生観コシヒカリ）

(3) てんこもり

平年に比べ、草丈、葉色は並、茎数はやや多く、葉齢は0.3葉進んでいる。

葉齢を揃えて比較すると、平年に比べ、草丈はやや短く、茎数、葉色は並となっている。

表3 「てんこもり」の生育状況（6月18日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色	
			(本/株)	(本/m ²)		葉色板	SPAD
R6	5月8日	33.1	33.6	634	10.5	4.4	39.9
R5	5月10日	31.6	28.6	552	9.8	4.4	40.3
平年	5月8日	34.0	30.4	579	10.2	4.4	40.9
前年比・差	-2	105	117	115	0.7	0.0	-0.4
平年比・差	0	97	110	109	0.3	0.0	-1.0

注) 平年 : H26~R5の平均

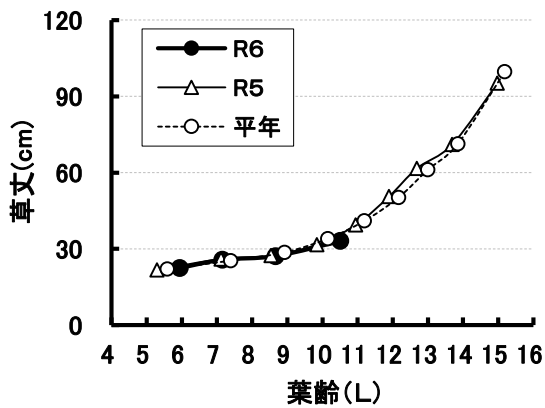


図10 草丈の推移 (生観てんこもり)

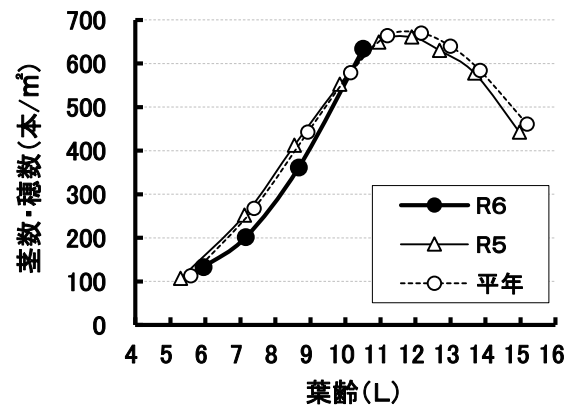


図11 茎数の推移 (生観てんこもり)

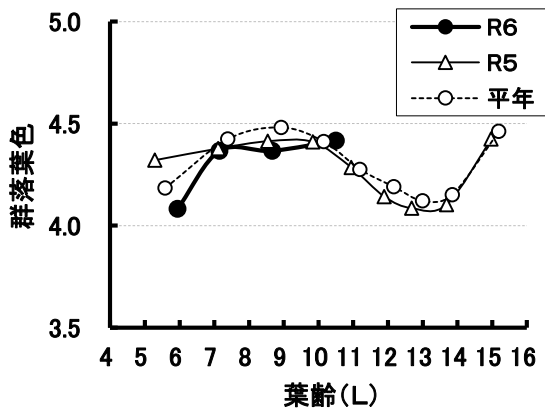


図12 葉色の推移 (生観てんこもり)

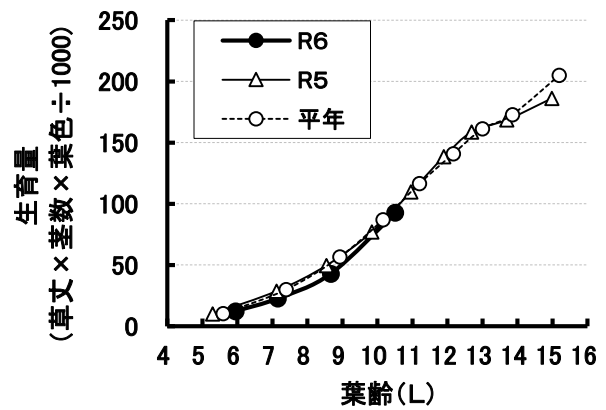


図13 生育量の推移 (生観てんこもり)

3 当面の技術対策

- ・ 茎数が大幅に増加しているが、中干しは一度に干し上げるのではなく、「田面に小さな亀裂が入る程度」の田干しを数回繰り返して、地耐力を高める。
- ・ 中干し後の間断かん水は、幼穂形成期頃までに足跡の深さ3 cm程度の土壌硬度に誘導する。
- ・ 幼穂形成期以降は、稲体の活力を維持するため、飽水管理（足跡に水が残る程度の湿潤状態を維持）を行う。

(1) 「てんたかく」の管理

- ・ 生育観測ほの幼穂形成期は、平均で6月22日頃と見込まれる（表4）。
- ・ 葉色の急激な低下を防ぐため、中干し後の間断かん水では田面を乾かしすぎないように管理し、幼穂形成期頃までに土壌硬度を「足跡の深さ3 cm程度」に誘導する。
- ・ 現在、茎数が平年に比べて多く葉色も確保されていることから、肥効調節型基肥栽培では、過剰籾数や倒伏を防ぐため、安易な追肥は原則施用しない。ただし、現在の葉色が4.0（砂壤土4.2）より薄い場合は、速やかに窒素成分で1.0kg/10a程度の追肥を行う。
- ・ 分施肥系では、穂肥は表5を目安に土壌区分や生育量に応じて施用する。
- ・ 幼穂形成期以降は、稲体の活力を維持するため、飽水管理を行う。

表4 生観「てんたかく」の幼穂形成期

年次	田植日 (月/日)	6/18時点の		幼穂形成期	
		葉齢(L)	(月/日)	葉齢(L)	(月/日)
R6	5/2	10.8	(6/22)	(11.2)	
R5	5/3	10.2	6/24	11.0	
R4	5/1	10.4	6/24	11.2	
R3	5/3	9.9	6/27	11.1	
R2	5/2	10.8	6/22	11.2	
平年	5/5	10.3	6/24	11.1	

注) ()内の数値は6月18日時点の予測値

表5 「てんたかく」の土壌区分別穂肥窒素
施用量の目安(kg/10a)

土壌区分	1回目 ^(注)		2回目	
	施用時期	施用時期	施用時期	施用時期
	幼形期	幼形期の10日後		
沖積 埴壤土	1.5	1.5		
壤土	1.5	1.8		
砂壤土	2.0	2.0		
洪積 埴壤土～壤土	1.5	1.8		

注) 以下の条件では1回目の穂肥を施用しない。
 埴土～埴壤土：幼穂形成期の葉色4.3以上かつ
 茎数650本/㎡以上
 砂壤土：幼穂形成期の葉色4.5以上かつ茎数
 700本/㎡以上

(2) 「コシヒカリ」の管理

- ・ 葉色の急激な低下を防ぐため、中干し後の間断かん水では田面を乾かしすぎないように管理し、幼穂形成期頃までに土壌硬度を「足跡の深さ3 cm程度」に誘導する。ただし、葉色が4.5を超えるほ場では、幼穂形成期まで落水期間が長めの間断かん水を行う。
- ・ 安易な追肥は、過剰籾数や倒伏を招くので原則、施用しない。
- ・ 作付前にケイ酸質資材や加里資材を散布していないほ場では、積極的にこれらの資材を施用し、稲体の充実を図る。

(3) 「てんこもり」の管理

- ・ 葉色の急激な低下を防ぐため、中干し後の間断かん水では田面を乾かしすぎないように管理し、幼穂形成期頃までに土壌硬度を「足跡の深さ3 cm程度」に誘導する。
- ・ 幼穂形成期前に葉色が4.0（砂壤土4.2）より薄い場合は、速やかに窒素成分で1.0kg/10a程度の追肥を行う。

(4) 病害虫防除の徹底

ア 斑点米カメムシ類

- ・ 気温の上昇に伴い斑点米カメムシ類の発生が多くなるおそれがあるので、イネ科雑草の穂が出ないように草刈りを徹底する。
- ・ 本田内のノビエやホタルイも斑点米カメムシ類の被害を助長するので、除草に努める。
- ・ 麦あとほ場において、後作までに日数を要する等の場合は、雑草の穂が出ないように草刈りや耕起等により管理する。

草刈り運動期間：6月28日（金）～7月7日（日）
一斉草刈り日：6月29日（土）～6月30日（日）

イ ニカメイチュウ

- ・ 要防除水準（防除時6月中下旬のさや枯最盛期被害茎率：3%）に基づき防除要否を判定し、適期に薬剤を散布する。
- ・ 前年に被害が多く見られた地域では、幼虫の発生がだらつくため、箱施薬剤を施用した場合でも必要に応じて適期に本田防除を行う。

ウ いもち病

- ・ 苗箱施薬を施用していない場合は、予防剤を6月20日頃までに遅れずに散布する。
- ・ 現在、県内でいもち病の発生は確認されていないが、BLASTAM情報（農業研究所）を参考に、常発地を中心に巡回し、葉いもちの発生がみられたら直ちに防除する。

BLASTAM情報（葉いもち予測システム）はこちらから →
（農林水産総合技術センター農業研究所HPの研究関連情報に掲載）



エ 紋枯病

- ・ 前年発生がみられたほ場で箱施薬剤を施用していない場合は、出穂3～4週間前（粒剤）または穂ばらみ期（粉剤、液剤等）の防除を確実に行う。
- ・ 本田防除は要防除水準に基づき防除要否を判定し（表6）、適期に薬剤が株元に付着するように散布する。

表6 紋枯病の薬剤散布適期と要防除基準

品 種	薬剤散布適期 (防除要否判定時期)	要防除水準 (発病株率)
てんたかく	出穂14日前頃	5%
コシヒカリ	出穂10日前頃	15%
てんこもり	出穂7日前頃	(15%)*

*「てんこもり」は基本防除とする。発病株率は追加防除の目安（暫定値）。

オ 白葉枯病

- ・ 常発地等では、出穂3～4週間前にオリゼメート1キロ剤を散布する。
- ・ 大雨によりほ場が浸水や冠水した場合は、白葉枯病が発生しやすくなるため、薬剤を散布する。

「富富富」の生育状況と当面の技術対策について

1 生育状況（生育観測ほ等データ）

近年に比べ、草丈、葉齢、葉色は並、茎数はやや多くなっている。

表1 「富富富」の生育状況（6月18日 生育観測ほ等）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢 (L)	葉色	
			(本/株)	(本/m ²)		葉色板	SPAD
R6	5月17日	32.2	21.7	471	8.7	4.5	43.2
R5	5月16日	32.7	20.1	435	8.5	4.4	41.0
近年	5月15日	33.0	20.6	442	8.7	4.4	42.1
前年比・差	1	98	108	108	0.2	0.1	2.2
近年比・差	2	97	105	107	0.0	0.1	1.1

注1) R6：11ほ場平均（生育観測ほ：4ほ場、新品種実用化・プラ削減 対照区：7ほ場）

注2) 近年値：H29～R5の平均

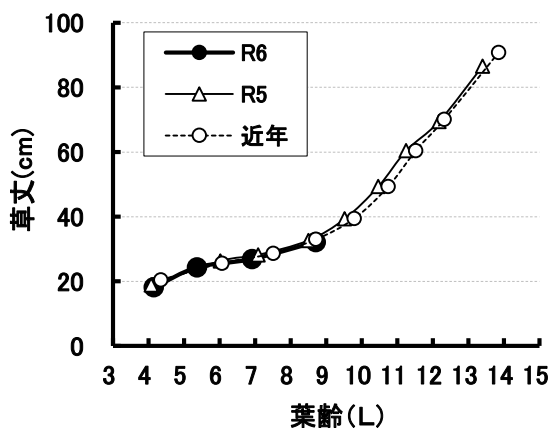


図1 草丈の推移（富富富生育観測ほ等）

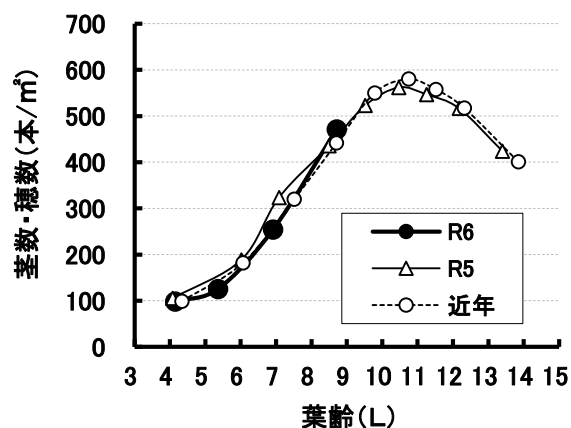


図2 茎数の推移（富富富生育観測ほ等）

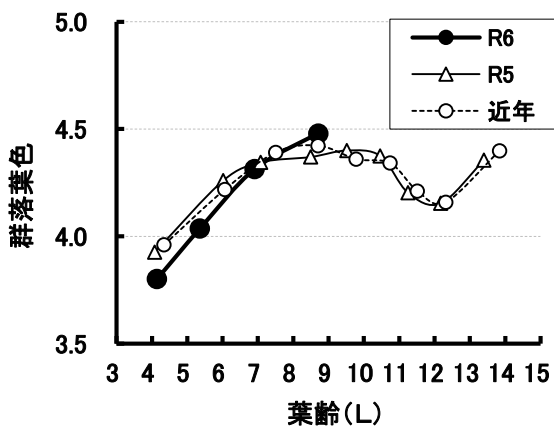


図3 葉色の推移（富富富生育観測ほ等）

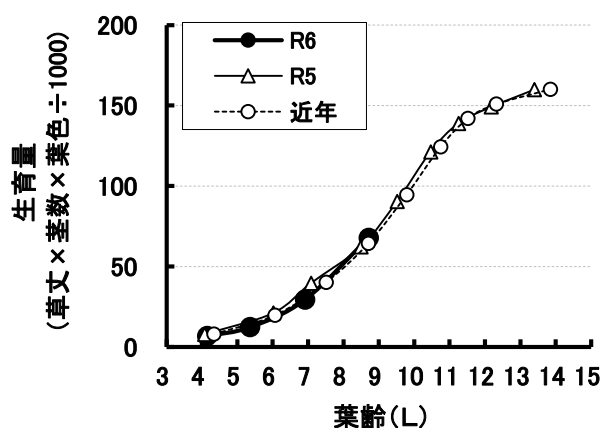


図4 生育量の推移（富富富生育観測ほ等）

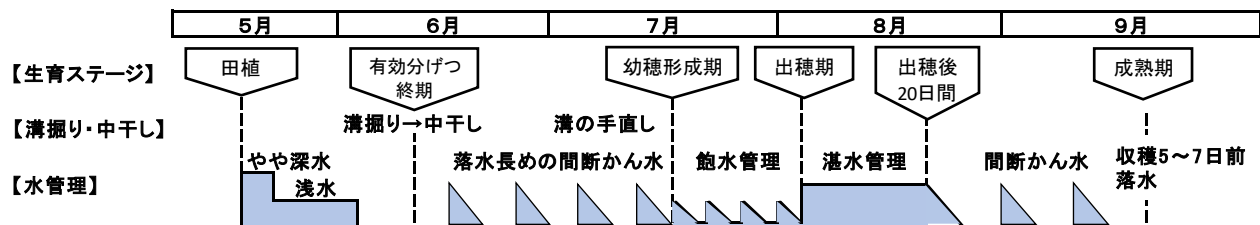
2 当面の技術対策

- ・ 茎数が大幅に増加しているが、中干しは一度に干し上げるのではなく、「田面に小さな亀裂が入る程度」の田干しを数回繰り返し、地耐力を高める。
- ・ 「富富富」は葉色がやや濃く推移することから、中干し後は幼穂形成期まで落水期間が長めの間断かん水を行う。

(1) 中干し後の水管理

- ・ 「富富富」は葉色がやや濃いめに推移することから、適正籾数に誘導するため、中干し後、幼穂形成期までは落水期間が長めの間断かん水を行い、幼穂形成期の SPAD 値を 35（群落葉色 4.0）程度に誘導する。

<水管理のイメージ>



「富富富」は葉色がやや濃く推移することから、中干し後は幼穂形成期まで落水期間が長めの間断かん水を行う。

(2) その他の管理

病害虫および雑草防除は、コシヒカリに準じて実施する。ただし、生育期間を通じた化学合成農薬の成分使用回数が12以内となるよう留意する。

なお、残草がある場合は、草種に対応した液剤等を用い、除草剤が雑草に確実に付着するよう丁寧に散布する。

次回の調査日は6月25日（火）です。

「てんたかく」の幼穂長と幼穂形成期の確認をお願いします。